

Y4-1

病棟と外来との連携による患者サービスの向上について

姫路赤十字病院 4階東病棟¹⁾、
姫路赤十字病院 副院長²⁾
○太田 加代¹⁾、嶋田 有生子¹⁾、世良 優子¹⁾、
赤松 信雄²⁾

【背景】当院産婦人科は、がん拠点病院と地域周産期センターの役割を担い、悪性疾患患者の治療とハイリスク妊産婦の管理を6人の医師で行っている。産婦人科の平均在院日数は6.5日、一日の外来平均患者数は89人である。手術前の検査は全て外来で実施され、手術前入院も1～2日である。また、術後も本人の回復程度により自由に退院日を設定できることとしたため、術後4日～10前後での退院となっている。疾患の告知、治療の説明など重要な説明は外来でされることが多く、継続したケアを必要とする患者が増加している。しかし、これまでは外来と病棟の看護単位は別々で、連携が十分にとれているとは言えない状況であった。そこで、平成18年4月から、病棟看護師が外来での業務を担当し、外来通院時から患者の情報を共有し、看護の継続に努めてきた。現在も、病棟勤務のレベル2以上の看護師は、外来業務を担当している。昨年度から、新たな取り組みとして、外来診察時に病棟看護師が、病棟オリエンテーションを行うと共に、入院診療計画書の説明も行っている。

【目的】現在行っている外来と病棟の連携を評価し、より良い患者サービスを提供する。

【方法】(1) 協働している医師・事務員 (2) 病棟看護師 (3) 患者にアンケート調査を行った。

【結果】(1) 医師、事務員共に患者情報が共有でき、説明がぶれなくなった。(2) 看護師は医師の説明を理解して対応がとれるようになった。(3) 患者は入院前に経過が理解でき、入院中も同じ看護師で安心できた。という回答が得られた。

【結論】病棟看護師が外来業務を担当することは、患者サービスの向上に繋がる。今回の調査から、今後も更に患者サービスの向上を目指した病棟と外来の連携に向けて取り組みたい。

Y4-2

ハイリスク妊婦のストレスとなる要因に関する検討

足利赤十字病院 すみれ4階病棟
○荻野 美由紀^{おぎの みゆき}、三澤 美恵

【目的】ハイリスク妊婦のストレスとなる要因を、入院をしている妊婦の調査から分析し明らかにする。

【対象】切迫流早産で14日以上入院、24時間持続点滴または内服治療を受けている初産婦7名、経産婦3名。

【方法】妊婦のストレスの要因とおもわれる困りごと・心配ごとについて、質問紙によるアンケート調査を行い、その後面接を実施。質問紙から得た記述内容と面接から得た内容は記述化し、カード化した。

【結果・考察】総カード数は60枚であり、サブカテゴリは20項目に、カテゴリは7項目に分類できた。各カテゴリのカード合計枚数は、物的環境が17枚で一番多かった。日常生活について11枚、経過に関するものについて10枚、社会的関係に関するものが9枚だった。サブカテゴリのうち多かったカードは「今後の経過について」で7枚だった。次に多かったのは「点滴について」で5枚だった。今回のデータから、清潔、食事などの基本的欲求、プライバシーに関連した心理・社会的欲求が充足されにくいため困りごと・心配ごとの項目が多く抽出された。しかし1番のストレスの要因となっているのは、基本的欲求、心理・社会的欲求が充足されにくいため困りごと・心配ごとではなく「今後の不安について」であった。それは対象者全員がハイリスク妊婦であったためであると考えられる。近年、高齢妊婦の増加や近隣の産科施設の閉鎖、救急病院である当院の特殊性により、さらにハイリスク妊婦の入院は増えていくと思われる。今回の研究より、今後プライマリーナーシングの充実をはじめ、「今後の不安について」の適切な情報提供やケアを行うこと、困りごと、心配ごとの緩和に努める必要があることが示唆された。